



Profile — 柏木繁男

1930年、会津若松市に生まれる。1954年、東京大学文学部心理学科卒業。日本国有鉄道研究員、東洋大学教授、千葉大学教授、城西国際大学教授を歴任し、現職。千葉大学名誉教授。主な著書は『性格の評価と表現』（単著、有斐閣）、『内田クレペリンにおける解析的評価法』（単著、金子書房）など。

幸運にも、フルブライトの研究員としてアメリカへ留学できたのは、約半世紀も前の遠い昔のことです。当時帰国されたばかりの東大名誉教授の東洋先輩に手伝って頂いた直交因子回転の論文が、*Psychometrika*に掲載されたのがきっかけでした。正式な論文など殆ど書いたことのない私の下手な英語の論文を丁寧に書き換えてくださったお蔭で、“accept for publication”の知らせを受けた時は天にも昇る気持ちでした。その時のカイザー教授署名付きのシングルスペース2枚綴りの手紙を、今でも大切に保存しています。このような濃密なコメントが書き込める学識の深さには驚きを禁じ得ませんでした。

カイザー教授にはウィスコンシン空港にわざわざ迎えに来て頂いたうえに、宿舎まで世話して頂きました。研究室での生活には何の拘束もありません。研究するもよし、寝て暮らすもよしです。好きな講義があったら自由に出てもよいのです。同じ研究室には、irt

なつかしいアメリカでの研究初体験

城西国際大学アセスメントセンター

柏木繁男（かしわぎ しげお）

の研究で名の知られている、当時准教授であったベイカーさんも居られ、二、三度お訪ねして話を伺ったことを憶えています。

irt といえば、当時シカゴ大とウィスコンシン大のセミナーが二度ほどありました。EM方式の導入で有名なボック教授の講演も聞きましたが、当時 irt にあまり興味のなかった私には理解不可能でした。今となっては、勿体ないことをしたものと悔やんでいます。

当時 ETS に居られたハーマン上級研究員をお訪ねした時のことです。有名な Dr. ロードのプロジェクトで、鮫島さんを含め、世界中の Psychometricians が集まっていました。直接話した研究者の中には、斜交因子回転プロマックスの算法の開発者 Dr. ブラウンさんが居られました。勿論、ハーマンさんとの直接的な接触は大変に刺激的で、いずれ君を ETS に呼んで一緒に研究しようと約束してくださいました。残念ながら、その約束は、ハーマンさんの急逝で実現しませんでした。

最近、今時、因子分析など研究する人は居ませんね、と言われることがあります。Dr. ヨーレスコッグの最尤推定的因子分析研究を頂点に、irt へと潮流が変わったことに原因があるのでしょうか。この冷やかしくも受け取れる発言に、次のように答えています。元々私は因子分析の中の因子回転の研究者なのです。特に「超多変数の因子回転」に関心があります。東大名誉教授の芝佑順さんがバリマックスを学んで帰国され、

その使用を薦めてくださいました。しかし、実際使ってみると、超多変数の場合にはバリマックスの因子回転の効果が無くなってしまいます。この難点はカイザー教授自身も認めておられたことですが、それを最初にハッキリ指摘して論文にしたのです。今では踏切は立体化や地下道化で事故が激減したことは誰でも知っています。しかし、半世紀前には、それを信ずる人は少なかったのです。250を超える要因項目群が踏切事故と関連すると考えられていました。そこで、因子分析的に要因項目群を分類し、線形回帰分析してみると、道路交通量が主要因であることがわかったのです。最初バリマックスを適用して失敗、そこで、私の直交因子分析を使って上記の結論に達したのです。同じようなことは、日本語のビッグ・ファイブの研究でも証明されています。仮説マーカー項目が適切に選定できないと、データをいくら多く集積しても無駄になってしまいます。Dr. ゴールドバーグさんが私のビッグ・ファイブ関連の論文を読み、B.De RaaD & M.Perugini (Eds.) (2002) *Big Five Assessment* への寄稿を薦めてくださいました。ゴールドバーグさんも超多変数のバリマックスの適用には悩んでおられたのです (Journal of personality assessment; 1996)。

皮肉になりますが、わが国には、欧米での成果の確証研究が殆どと言っても過言でないと思います。日本発の世界をリードする探索と確証研究の発現を期待します。